

日本ボーイスカウト北海道連盟だより 148号



# 斧の響き



## 特集：パトロール・システム研修会

北海道のボーイスカウト運動推進の重点施策「スカウト運動の基本に基づいて、よりよいスカウトを育てよう！～まずは班制教育の徹底！～」をもとに、ボーイスカウト教育の特性の一つである「パトロール・システム（班制教育）研修会」を開催しました。

〔日 時〕平成26年1月25日（土）～1月26日（日）

〔場 所〕北見市留辺薬町字滝の湯 塩別つるつる温泉



### 講演

## 「今なぜ、青少年の体験活動か — ボーイスカウト指導者に求められる資質 —」

～子どもたちの自主性を伸ばす小集団活動を育むために～

ふるさと再生塾塾長 小山 忠弘

### 〔社会教育の衰退〕

今、全国的に子どもの数が減っており、少年の団体活動が衰退しています。

その大きな原因は、市町村の社会教育が衰退したためだと思います。皆さんもご承知のように最近では社会教育という言葉があまり聞かなくなり、代わって生涯学習という言葉が耳に思うのですが、生涯学習という言葉が使われ出してから、実は社会教育が衰退し、同時に各種の団体活動も衰退してしまったのです。

市町村の社会教育行政が盛んな時代は、少年団体の育成をどうするか、青年団体や婦人団体（今は女性団体と言う）の活性化をどうするかなどの論議が活発に行われていました。

今日参加の皆さんの中には、かつて青年団体活動もされた方もおられると思いますが、地域の中では各世代が団体活動に参加して、そこで人と人との繋がりがあり、その団体を地域の人達が支えていたのです。ところが今は、少子化が進みそれに伴って少年団体活動も衰退してしまったというのが現在の状況です。

### 〔地域社会の中で、ボーイスカウトが認識されていますか〕

このような状況の中で、様々な体験活動を中心とするボーイスカウト活動がなぜ必要なのでしょうか。

ボーイスカウト活動と、地域子ども会やスポーツ少年団の活動と何が違うのか、なぜ違わなければならないのでしょうか。そうした問題意識を持って皆さん方がリーダーとしてスカウトたちを育てていかないと、

少年団体活動そのものがダメになってしまうのではないのでしょうか。

自分たちはボーイスカウトの指導者なのだから、所属するスカウトに、パトロール・システムをどう教えるかという視点だけだと、結果としてはボーイスカウトそのものも広がっていかないのではないのでしょうか。

社会教育という話をしましたが、どの市町村の教育委員会にも社会教育主事という人がいます。皆さんは時々教育委員会に行って、社会教育主事さんと「うちのまちの少年団体活動の現状はどうですか、今後どのようなことを考えていますか」、というような話をしたことがありますか？

開会式で国旗儀礼を行いました。祝祭日に毎回自分の家に国旗を掲げているという方はどれだけおられますか、私は祝祭日には必ず玄関に国旗を掲げています。

皆さんは、ボーイスカウトの集まりだから国旗に向かって礼をし、君が代も歌いますが、地域の中で日常的に何をしているかが大事なのです。子どもたちに大人のどのような姿を見せていくか、ということが問われているのです。

皆さんは今制服を着ていますが、日常生活の中で、地域の中で、そういう姿を見かけることはありません。スカウトに入っている子どもたちも、普段は制服を着て歩いていないので、普通の子どもと何も変わらないのです。だから、地域の子どもたちも住民もボーイスカウトという少年団体の存在を知らない人が多いのです。

スカウトという存在を地域の子どもや親たちにどのようにしたら認識してもらえるのかということが、喫緊の課題だと思います。

先ほど申し上げたように地域の中では絶対的に子どもが少ないわけですから、ボーイスカウトの子どもだ、スポーツ少年団の子どもだ、地域子供会の子どもだという区別をして地域の中で子どもに接する時代ではなくなっているのです。そこに住んでいる子どもをみんなでするのかという考えに立って、例えば教育委員会が主催して、ある行事をやった時に、いろんな子どもが集まってきたとします。その中にボーイスカウト活動をしている子どももいて、ボーイスカウトの子どもは、パトロール・システムで訓練されているので、すぐにリーダーシップを発揮できるというようにスカウトの子どもたちを育てていかないと、地域の子どもたちから認識されないと思います。

### 【社会教育主事として】

私の職業は高校の教員でしたが、在職中に社会教育主事の資格を取得し、11年間の教員生活に別れを告げて社会教育行政の道に入りました。私は今75歳ですが、老若男女を問わず、柔軟な発想で多くの人々とお付き合いが出来るというのは、社会教育に携わったことによるものです。

先程もお話したように地域の中にどのような課題があるのか。今、子どもたちがどういう状況に置かれているかということなどを広く考えられるのは社会教育のおかげだと思います。

社会教育主事になってからは、石狩教育局、本庁の社会教育課で青少年教育を担当したのち、東京の上野

にある国立社会教育研修所の専門職員として、社会教育全般を担当させていただきました。その後文部省社会教育局青少年教育課で青年教育を担当しました。

昭和57年当時の課題は、「高校生のアイデンティティをどう確立させるか」「社会的に高校生をどのように活かすのか」ということでした。その時、課長から「小山は高校の教員をやっていたのだから、高校生に今必要なことや国がやるべきことは何か、来年度の予算要求案を作ってみろ」と言われ、「高校生がただ学校で勉強するだけではなく、自分たちが社会の中で必要とされていることが実感できる出番の機会づくりが必要なのではないか」と考え「高校生の社会参加促進事業」を企画して大蔵省の担当者に説明したところ、「文部省さん、高校生にボランティア活動事業をやったって、参加する高校生がいるのですか」「参加したって、職業高校の生徒くらいじゃないですか、普通科の生徒は参加しないでしょ」と言われましたので、「あなた方のようなエリートばかりでは、日本の国はダメになります。成績が優秀な高校生にボランティア活動をやってもらいたいです」と言ったら、ジロツと睨まれました。

予算は付けてもらえないと思っていたのですが、大蔵省からの回答は、こちらの要求した満額を付けてくれました。それで昭和58年から「高校生のボランティア活動事業」がスタートし、都道府県が10年間ほど続けました。

#### 【地域社会と乖離していませんか】

子どもたちには、ただ勉強だけではなく、自分たちがそのまちの中で、必要とされているのだという思いを持たせていくのが、スカウト活動においても大事なことだろうと思います。

体系的な教育マニュアルや研修体系が出来ている少年団というのは、わが国ではボーイスカウト・ガールスカウト以外にはないのですが、皆さんはそのシステムの中で育てられて今日があるわけですね。

俺たちはこのようにして教えられ、鍛えられてきたのだから、だから今のスカウトたちにも、同じように教えてやろうとしているから、今の子どもたちは魅力を感じないのだろうと思います。皆さんを外部から見て感じるのは、リーダーという意識とスカウトの意識と乖離しているのじゃないかなと思います。

地域の教育委員会の社会教育主事などと一体となって、地域の子どものをどういうふう育てるのか、そのために一緒にどういう行事をやるか、ボーイスカウトだけに捉われずに、少し視野や思考を広げていけばいいのではないのでしょうか。地域の行事に参加するとき、ボーイスカウトの子どもたちだけ制服を着て参加すると、他の子どもたちとの間に違和感が生まれると思います。制服を着ていなくても、その行事の中で、これまで身に付けてきたことを率先して活かせるようにすることが、他の子どもたちから見直され、スカウトの自信につながると思います。

日常、地域の中では普通の子どもたちと同じ活動をさせることが大事なのです。スカウトだけで活動するときだけは制服を着て、団の規律に従えばよいのです。

## 《恵庭での試み》

私は少年団体に直接関わっていませんが、何とかして人と人の繋がるまちづくりをしたいと、恵庭でまちづくり推進委員をやっています。また、黄金中央カリンバ会という地域の老人クラブで、月1回町内のそば屋に集まって酒を飲みながら、子どもたちにふるさと意識をどうしたら育てることが出来るかなど、知恵を出し合っています。

その中の一つのアイデアとして出されたのが、恵庭駅の東口に恵庭ふるさと公園という素晴らしい公園があるのですが、管理が悪くあまり市民に使われていないのです。秋になると、カシワの木の落ち葉が隣近所の住宅の前を埋め尽くすものですから住民は「この落ち葉を市役所はなんとかしてくれ」と文句の電話を掛けるのです。そこで去年の11月23日勤労感謝の日に、子どもたちを公園に集めて、落ち葉集めをさせ、それで焼き芋をやることにしたのです。

しかし、計画は出来たけれども実践するまでには、まず役所の壁です。皆さんの所もそうだと思いますが、恵庭市役所は、公園の中で火は焚かせません。恵庭の子どもたちにふるさと意識を持たせるためには、この公園を有効に使いたい。準備万端にして火には気を付けるので是非やらせて欲しいと言ったら、公園管理課は了解するが、消防の許可を得て欲しいというので、次に消防に行くと「分かりました、その代り残り火を消す際に我々の出番を作ってください」。という条件でOKが出ました。消防にとっても出番があるわけですから、協働によるまちづくりの理念に適ったわけです。

落ち葉を燃やした煙の臭いを嗅ぐ、煙は目に入ると痛いものだ、煙の臭いとはこういうものだ、たぶん帰る時子どもたちの服には煙の臭いが染みこんでいたはずです。こうした体験が後になって、ふるさと公園の落ち葉を集めて焼き芋をやったなあ、煙の匂いってしばらく取れなかったなあ。感性の瑞々しい頃の体験は生涯記憶に残るものなのです。

## 《地域社会の活用を》

皆さんは隊長やリーダーをしている時、指示や指導は全て自分たちがしなければいけないという発想はやめて、地域にはどういう人がいるのかを把握して、そういう人たちをうまく結びつけることがこれからのリーダーの役割だと思います。

地元の老人クラブの会長さんとか、町内会長さんとか、教育委員会の社会教育主事さんなど、そういう人たちに皆さんが直接働きかけて、「そのまちにいる少年たちの出番づくりをどうするか」。を考えたネットワークを皆さん方が働きかけて作るのです。

地域の子は地域で育てるという協働のシステムを構築することが必要なのです。

## 〔自己変革を〕

子どもたちの現状を踏まえて、リーダーとして何をしなければならぬかといいますと、平成21年の定山溪での全道研において

「指導者であるあなたは今、過去に自分が学んだボーイスカウトのイメージのまま自分が経験し、成功したよい時代の思い出の中で団員の育成にあたっていないか。つまり、今の子どもたちという新しい酒を、自己変革が出来ない指導者という古い皮袋に入れて、スカウト活動をしていませんか」

と生意気なことを申し上げました。

皆さん方がこれまで多くの経験を積んで来たとしても、年齢と共に、時代と共に変化します。したがって、新しい酒は、新しい皮袋に入れて熟成させるのが原則なのです。子どもがどんどん変わっているのに、皆さんがあまり変わらないのは古い皮袋しかなくなります。どうして新しい酒を古い皮袋に入れたらダメなのかと言いますと、古い皮袋は皮が固くなって吸収力がなくなっています。所々ひび割れもしてきます。熟成する前に大事な酒が漏れるからです。

我々の時はこういうふうにして育てられて来たもんだ、だからお前たちもそうしなさいという意識でやっていると、子どもたちは育っていかないのです。

皆さんの時代とは大きく変わっている子どもたちを正しく受け止めながら、ボーイスカウト活動の意義と役割をどのように理解させ、納得させていくかというのが、今の皆さん方に求められていることだと思うのですが、果たして自己変革はできているでしょうか。

### 〔指導者としての理念を〕

#### 青少年団体指導者の原点は上杉鷹山と山本五十六

何度もどこかで皆さんは目に触れて、聞かされていると思うのですが、言葉の意味を深くかみ締めてみる必要があると思います。

「してみせて、言ってみせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ」「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり」

というのは、米沢藩の第9代の藩主で上杉鷹山の言葉です。

この人は大変な優れ者で、たえず人々にそう言いながら自分で模範を示し、励まして立派な藩を仕立てたのです。そのことを後に海軍大将になった山本五十六が知っていて、

「やってみせ 言ってみせて やらせてみて ほめてやらねば 人は 動かじ。  
話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。  
やっている姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

と言っているのです。

これはリーダーとして上に立つものの言葉です。どんなリーダーであろうが、小さな子どもの目線で話

し合う。真剣に耳を傾けて聴く。その存在を認めてやる。

そういう事を日常的にやらないと、ボーイスカウトに入っても面白さというのは、なかなか見出すことが出来ないのかも知れません。

そして、指導者の心境として、次のように述べています。

「苦しいこともあるだろう。  
云いたいこともあるだろう。  
不満なこともあるだろう。  
腹の立つこともあるだろう。  
泣きたいこともあるだろう。  
これらをじっとこらえてゆくのが  
男の修行である。」

これは山本五十六での言葉ですが、「男の修行」をボーイスカウトの「リーダーの修行」だと思えばいいですね。

皆さん方の少年時代と今の少年はまったくと言ってよいほど質が違います。何かを指示してもすぐ「うん」ということを聞いてくれませんが、なかなか言う事を聞かない子どもたちだからこそ腹も立つことが多いと思います。

でも今の少年はきちんと筋道を立て明確に指示すれば、しっかりと聞いてくれます。いい加減にやっていると聞いてくれません。

ということは、地域の大人として人間関係を作る時にも同じ事が言えます。

今、少子化の中で地域のコミュニティを作ること、つまり人のつながりを作ることが重要な課題と成っていますが、その中核となるのは誰かと言いますと、町内会長でも、老人クラブの会長でもないのです。

核になるのは地域の子どものことです。だから子どもがいないと、世代を超えたコミュニティは作れないのです。その核になる子どもを育てるのが皆さんの役割なのです。

「人は自分の意思で自分の過去と他人を変えることはできない、しかし自分の変わった姿を見て人が変わりうる」と言われます。指導者とはそういうものだと思います。

「やれ！」と口で指示しているだけでは変わらない。山本五十六のようにやって見せて、言って聞かせて、させてみて、ほめてあげる。ことの繰り返しなのです。

企業研修の中でよく言われるPDCA: Plan・Do・Check・Actionですが、山本五十六は、これと逆に一番最後のやってみせ: Actionを先に持ってきているのです。言って聞かせてというのはPlanですよ。させてみて、というのはDoです。ほめてやる、というのはCheckですから、つまり評価なのです。

## 《柔軟な発想で》

なんでもPDC Aの順番で進めないとダメかという、その時々状況に応じて変えなければならないと思います。

4つの要素は柔軟な発想の組み合わせを変えても良いのだと思います。指導者の姿勢として大事なのは、できないという発想ではなく、できるという発想に立ってスカウトと共に知恵を出し合うことです。

## 〔青少年の生活実態等の現状と課題〕

### 《基本的生活習慣の乱れ》

#### ～生活の夜型化、朝食欠食などの基本的生活習慣の乱れ～

皆さん、いろんなところで見聞きしているでしょう。特に今の子どもは、生活の夜型化、朝食欠食などの基本的な生活習慣の乱れがあり、国が「早寝早起き・朝ごはん運動」というのを提唱しています。

ボーイスカウトの活動の中にも「早寝早起き・朝ごはん運動」を取り入れて一緒にやって行けばいいのです。日常地域の子どもたちと同じ歩調で進めていながら生活習慣を変えていく取り組みも大事だろうと思っています。

### 《希薄な対人関係》

今問題なのは希薄な対人関係です。これは大人もそうです。特にスマホやiPadなどが普及するにつれて、増々人間関係が希薄になってきました。

皮肉ですよね。科学の技術進歩というのは便利になりますが、それとは裏腹に人間がだんだん弱体化してきます。足腰も弱ってきます。知能も弱ってきます。でもその便利さにあこがれてみんな流されていきます。一番必要な人と人との対話が欠けてしまいます。

現実の駆け引きとか怖さを知らないから、携帯で出会ったのが本当の友だちのように思って、指示されたことをそのまま実行して犯罪を犯すということがあります。

#### ～子どもへの保護者の関与の低さ～

今必要なのは、人と人とのふれあい、人と人が直接言葉を交わす活動が今少年団体活動の中で求められているのだと思います。

地域の大人の青少年の関わりが、だんだん少なくなってきました。家庭の中でも、子どもにゲーム機を与えておけば親はいちいち面倒見なくてもよいし、親は別なことが出来ます。親が子どもを育てるのに手間暇かけるということから、手を抜いてしまっているのです。

#### ～地域の大人の青少年への関わりの少なさ～

このような状況のもと、誰が地域の中で子どもを育てるかという、残念ながらそれは親でもないし学校

でもないのです。学校は教科書を教えることで汲々としています。そうすると、地域にいる人たちが、その地域にいる子どもたちを皆で知恵を出し合って育てていかなければならないのです。

しかし、学校から帰ってきた子どもが夕ご飯を食べるまで地域で遊んでいるかといったら、いないですよ。いろんな習いものに行ったり、塾に行ったり、様々な活動をしています。

### ～仲間と交流する体験の少なさ～

そうすると、本来の地域に根差した活動はいつやれるのかといいますと、林先生の言葉を借りれば「今でしょ」と言うのだろうけど、その今が子どもにはないのです。

だから集中的にピンポイント的に体験活動事業を地域の人たちと一緒にやって行きながら、必要なことを体験を通して感じとらせていくということが大事なのだろうと思います。

### 《直接体験の少なさ》

#### ～スポーツ等の体を動かす体験の少なさ～

仲間と交流する体験の少なさ。なんといっても直接体験が少ないというのが今の子どもの決定的な弱点なのです。

スポーツで体を動かすといっても、あまり動かさない。スポーツ少年団に入っている子どもは別として。北海道の子どもは今、学力では47都道府県のうち46番目です。体力もずっと落ちています。どうすればいいのでしょうか。

学力については、秋田は雪国でありながら全国のトップです。それでは秋田方式を見習って、とにかく勉強する時間を増やせばよいのかというと、そうすぐに学力が高くなるものでもないと思います。

私は暗記的な知識よりも大事なのは感性が瑞々しく豊かなうちに、地域の中でどういう体験活動をたくさんさせた方が、後になって、子どもが本気で何かになりたいと思ったら、子どもはその時本気で勉強をするのです。

#### ～自然体験の少なさ～

のべつ幕無しに勉強、勉強と攻め立てても出来るものではない。私はむしろそれよりも、体験活動をさせた方が結果として本物の学力が伸びていくものだと思っています。

そのことは国の調査でも出ていまして、子どもの頃に体験活動を積んだ子どもの方が、後になって学力も高くなるし、学校を出て地域社会に出た後も体験活動をした人は、老後自分で何をするかとか、地域の中で自分がどういう貢献活動をするのかというようなことを決断するときは、自分の判断で容易に関わることが出来るという結果が出ているのです。

大事な問題があります。本物の自然体験をいま北海道の子どもたちが知らないというのは、これは大人の責任だと思います。東京と同じような生活をさせています。留辺蘂に住んでいても、札幌の子どもとそれほ



ど自然体験活動というのは変わってないのです。

札幌の子どもは、例えば滝野だとか、藻岩山とか三角山などいろんな山もありますので、意外と多くの自然体験をやっているのですが、留辺蘂のように周りの自然が豊かであっても、本物の自然体験活動をしているかというところでもないのではないのでしょうか。そこが問題なのです。

### 《情報メディアの急速な普及に伴う問題》

情報メディアの急速な発達。情報メディアを子どもから遮断することは出来ません。

子どもがそういう世界でこれから生きて行くのですから、この状況に慣れさせておいて、間違った使い方をしないような指導をしっかりとすることが大事なのです。

こういう時代が来るということを予測した人がいました。

日本の何人かすぐれた頭脳集団が未来の世界のレポートを書いた「ローマクラブ」のメンバーです。これからは高度な科学技術がどんどん発達してくるだろう。その一方で何が必要かといえば、それに見合うだけの人間としての情緒的なふれあいや出会いの機会を持たないと、偏った人間になってしまうというものです。

それをハイテク・ハイタッチという「ハイテクノロジー／ハイタッチ／人間の心のふれあい」のバランスが大事なのだということです。

少年団やボーイスカウト活動をなぜするかといえば、よりよい人間として成長するためにやっている活動ですから、ボーイスカウトの教育課程通りに子どもを教えていくというのは、当然それはあっていいのだけれども、そこにこだわりすぎていると子どもは面白さや魅力を感じないのだろうと思います。

### 〔すべての青少年の生活に体験活動を根付かせ、体験を通じた試行錯誤や切磋琢磨を見守る〕

今も子どもたちは失敗体験が少ないと思います。

皆さんの団で、子どもたちを川に連れていったら、裸足で川の中を歩かせてください。川の石には苔が生えています。裸足で歩くとツルツと滑ります。それから、触った感覚のあの何とも言えないヌルとしたとか、ツルツとしたとか、そういう生理的な感覚を味わえるというのは実際に川の中を漕いで歩いてみなければ味わえないのです。滑って川の中にザブンと転ぶという体験をさせることが必要なのです。

私が文部省にいる時に、無人島など要するに人里離れたところで、10泊11日の長期自然体験活動事業の予算を付けてもらいました。北海道では、「フロンティア アドベンチャー事業」と称して何か所か実施しましたが、上川管内の美深町では夏と冬の2回、町をあげて道内から応募してきた子どもたちを歓迎してくれました。

1班6人に高校生のリーダーと大人のリーダーを付けます。札幌から参加した子どもが3日目に朝食の当番に遅れて、その班だけ朝食が遅れました。理由を聞いたら「実は蛇の世話をしていたので遅れました」と言ったのです。みんなびっくりしましたがその子は、札幌から参加する時に、美深の山の中には必ず青大将がいるはずだ。その青大将を捕まえて自分の寝袋に入れて蛇と一緒に寝ようというプランを持っていたのです。

着いてから、いつ、どこで捕らえたのか知りませんが、家を出る時に持ってきた玉ねぎの袋に太い長い青大将を入れて、寝袋の中に隠していたのです。炊事班の当番に遅れたので分かったのです。

その時に、私は高校生のリーダーが素晴らしいなと思ったのです。彼はきつくは問い詰めなかったのです。私がリーダーだったら「お前何やっているんだ、お前一人ために迷惑かけてご飯が遅れた、そもそもみんな生活している中に蛇を持ち込むとはなんだ！」と、叱りつけたと思うのです。彼は「蛇も大事だけれども、それ以上にみんなに迷惑かけてはいけないこと、蛇がいることをあんたの班の人たちは今日分かったのだから、この後も蛇と一緒に自分の寝袋で寝ていかどうかみんなの意見を聞きなさい」と本人に解決を任せたのです。班員は袋から出ないでいれば僕たちはいいですよ、という話になって、彼は10泊11日の間、美深の山の中で蛇と一緒に生活をしたのです。

その子はもう20年以上経っていますから、どんなふう成長しているのか興味があります。もしかしたら生物学者になっているかも知れません。体験によって人が育つというのはそういうものだと思うのです。その子の一生に影響を与えるような体験を原体験というのです。

ボーイスカウトでの活動の中で、たった一つの小さな体験やリーダーのたった一つの言葉によって大きく伸びる可能性は十分あるのです。

#### 《多様な体験活動の機会を提供し、すべての青少年の生活に根付かせる。》

多様な体験活動の機会を提供し体験活動をすべての青少年の生活に根付かせる。これが全国的な課題です。どの市町村も同じです。子どもが少なくなっている中で、青少年の体験活動を根付かせるということが至上命題なのです。体験活動を通して、青少年の試行錯誤や切磋琢磨を大人が見守り支援するということが重要になっています。

残念ながら、いま大人が大変心もとなくなってきました。昨年度400人を超える教員が処分されましたが、その中の半分は教え子に対するわいせつです。子どもを教える教員が善悪の判断をして生きるモデルも示せないのです。警察官もストーカーやわいせつ行為をして処分される時代です。一方、店は偽装です。金さえ儲かれば違う物を買っても構わないという状況ですよ。

こうした世の中でどういう人を生きるモデルとして見習えばよいのか、今の子どもたちは本当に不幸だと思います。

そうすると、この世の中で嘘でないもの、真実なものというのは、大自然です。自然体験活動によって、自分が感じ取ったものが本物なのです。誰かが与えてくれた知識は間違っているかもしれない。真っ暗闇の中で手探りで歩く体験も、それは自然が持つ怖さなのです。そういった体験の積み重ねが人間性豊かな人に育っていくのだと思うのです。

#### 〔今後の青少年の体験活動の推進について（答申）〕

今年の1月21日、中央教育審議会が「今後の青少年の体験活動の推進について」の答申を出しました。

その答申では、青少年の体験活動の定義・意義・効果について、

「体験活動は意図的かどうかを問わず、直接自然や人・社会等とかがかわる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じて、学ぶ取組みを包含している」

ことと定義しています。

だから意図的かどうか、どんな場合でもいいのです。体験活動に関わった子どもが、五感を通じて何かを感じとること、五感に染みこませることが体験として 大事なのです。

### 《体験活動の定義》

「体験を通じて何らかの学習を行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」を体験活動という。

今までは体験活動と言ってきましたが、体験活動には次の4つの分野があるのです。

- ① 生活・文化体験活動
- ② 自然体験活動
- ③ 社会体験活動
- ④ 職業体験活動

ボーイスカウトの日常活動の中でこの4つの活動をどのように組み合わせて行くかを、今後考えていくべきだと思います。

ボーイスカウトの活動はとかく自然体験活動、自然の中でどうやって命を守り、たくましく生きていくかっていうのが主なように見えますけれども、実は①の生活や文化を引き継ぐ、守る、地域の文化を守る、地域の文化を育てる、そういう体験活動もボーイスカウトの活動の中では、非常に重要なことだと思っています。

②の自然体験。これは言うまでもありません。

皆さんが、たぶんPTAにも顔を出されていると思いますけれども、PTAのお母さんやお父さん方が、夏休みに子どもを連れて自然体験活動をさせるのであれば、出来合いのコンロだとか、ガスバーナーみたいなものを持って行かないで、自分で火を起し、煙が目に入ってボロボロ涙を流すという体験をさせてください、そういう事をボーイスカウトのリーダーがPTAの皆さんに訴えていくというのも一つの役割なのだろうと思います。

③の社会体験活動って分かったようで分からないのではないかと思います、今現実に行われている社会体験活動にはどういうものがあると思いますか。

例えば、赤い羽根募金も一つの社会体験活動です。募金を通じて社会のために役立つ、社会のために貢献する活動を社会体験と言います。自分がそういう体験をやったことによって、社会の中で少しでも自分が役

立っているのだという思いを持たせることです。

日本最北の稚内市立宗谷中学校では、何十年も学校で燻製を作る体験活動をやっており、その作った燻製を中学校2年生の時に修学旅行で札幌に来て東急ストア（現：東光ストア）を中心にして市内のデパート5店舗で、持ってきた燻製を売ります。

店舗の一部を貸してもらって「宗谷で捕れたタコです。父さんが捕ったタコです。おいしいですよ」とか、自分たちでのぼりも作ってお客さんに呼びかけるんですが、なかなか最初の一声が出てこないのです。

そのうちに、「今年も来たね、待ってたよ」ってリピーターが声をかけてくれると、とたんに元気が出て「うちの父さんが捕ったタコです。美味しいです」って一言ずつですが、だんだん「いかがですか」とか、「今年も来ました」とかって自分で声を出せるようになり、持ってきた50キロの燻製を即完売するのです。

そういう体験活動をして学校に帰った時に、その子どもたちが思ったことは「私たちでも知恵を出してがんばれば、この宗谷のために出来ることがあるんだ」と地域社会の一員であることに気づくのです。

次に大事なのが④の職業体験活動です。

人が生きるというのはどういう所で、何をしているのかということ、この職業体験をさせることで学びます。兵庫県では十数年以上前から、県の教育方針で中学2年生になったら1週間、職場体験に出します。職場を選ぶのは自分で行き、担任の先生は一切ノータッチ。1週間何をするかというのも子どもに計画を立てさせます。自分で計画を立てて、職場に頼みに行くのも自分です。先生は行きません。

兵庫県はこの事業名を「トライアルウィーク」と名付けて、中学2年生が必修です。何も先生のいうことも聞かない、暴れまくっていた生徒が、1週間の体験で茶髪銀髪にしていた髪をきちんと黒く染めたり、先生に対する言葉づかいが悪かった子がきちんと先生に敬語を使って言うようになるのです。

人間の教育は学校教育では限界がありますし、家庭教育も同様です。家庭・学校・地域社会の3者の緊密な連携が欠かせないのです。

今回の中央教育審議会の答申では、体験活動を重視して、体験活動の意義・効果について

- ① 社会を生き抜く力を養うことが出来る。
- ② 自然や人との関わり方が分かる。
- ③ 規範意識・道徳心等の育成につながる。
- ④ 勤労観・職業観の醸成につながる。

と述べています。

このことを踏まえて、従来の出来上がっているマニュアル通りの研修を行うのではなく、やりながら変化する中で今、ボーイスカウトの役割・意義は何か。それに答えられる活動をどうすればいいのか、という

ところが今後の研修の在り方として問われていくだろうと思います。

### 〔少年団体が育つ組織の原則〕

リーダーが子どもたちを操ることや、形だけの参画をさせてはいけない。

## ロジャー・ハートの梯子階段の原理

→ 各自の団がどの段階であるか、適正な評価が出来るか

●見つめよう！今の団を、考えよう！明日の自分の姿を。

8、子どもが主体的に取り掛かり、大人と一緒に決定する。

7、子どもが主体的に取りかかり、子どもが指導する。

6、大人がしかけ、子どもと一緒に決定する。

5、子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる。

4、子どもは仕事を割り当てられるが、情報は与えられている。

3、形だけの参画

2、お飾り参画

1、操り

この8つのはしご、は「ロジャー・ハートの“子どもの参画”」です。

北海道連盟が平成23年7月に発行した「パトロール・システムとは・・・」の冊子に、5頁にわたり詳しく掲載されているので、皆さんすでにご覧になっていると思います。

このはしごの1段目2段目3段目までは、これは参加もしていないし参画もしていないのです。

参加と参画は全く違まして、自分できちんと意志表示を出来る関わり方が参画です。今日は〇〇の会があるから集まれと言われて、自分の明確な意思がないままに集まってくるのは参加です。

なぜこの行事をやるのか。やるとすればどうするのか、みんなで知恵を出して考える。そのことにより子どもの想像力とか、生きる力を育てていくのです

先程紹介した北海道連盟が刊行した「パトロール・システムとは・・・」の資料に、事例として掲載されていた札幌の団が行った陣取りゲーム資料を読んでいたら、どういう陣地を作るか、陣地の城を造るといったら城だけ造ればいいのかと思いますが、城を造るだけでなく城に来させないようにするためにはどうするかということを、班の中で知恵を出して考えているわけです。こういうことを通じて子どもの想像力とか、生きる力が育まれていくのです。

あるグループは分からないように落とし穴をつくって上にさーっと雪をかけておけば、その城に行く前にみんな落ちるといふ仕組みは武士の時代に城を築いて堀を掘ったと同じ発想じゃないですか。子どもたちに

考えさせると、昔の武士と同じ発想で、城や自分たちの仲間を守るということに繋がってくるのですね。

さっきの美深の冬の場面での話ですけれど、150mくらい離れた川まで水汲みに行かせるのに、一人では危ないし、一人で20リッターのポリタンクを2つ持ってくるのは出来ないだろうからと、我々大人は二人1組で順番を割り振ったら、いつの間にかどの班も一人で水を汲みに行くんですよ。

20リッターのポリタンクに水入れたら重いですよ。それなのに一人で行くようになったのです。冬ですから、2つのポリタンクを紐でつないで雪の上を引っ張ったのです。だから一人で済むのです。それが生きる知恵というものです。

トイレは穴を深く掘って板を渡しただけです。臭いがしないように、地元の製材工場からおが屑をもらって来て使用後に撒くのですけれども、冬ですからだんだん高くなって渡している板よりも高くなった時にどうするのかと指導者は黙って見ていたら班長の代表が、指導者の所に来て「テントの横にある木の枝を少し切ってもいいですか」、「枝を切ってもいいが何に使うんだ」と聞いたら、「高くなったうんこを突いて崩すんです。」という返事が返ってきたのです。

結局必要に迫られると子どもたちはちゃんと知恵を出します。

自然体験活動というのは生きる知恵を生んでいくのです。

このロジャー・ハートの8つの子どもの心理的な状況というのを、指導者はよく理解していなければいけないのです。

少なくとも子どもが主体的に関わるのは、4番目5番目6番目7番目からですけれども、一番望ましいのは8番目ですよ。

大人が言わなくても主体的に子どもが計画し、ちゃんと仲間を引っ張ってやってくれるところまで成長させるのが狙いなんです。

こういったことが日常的に出来ると、東日本大震災の時に逃げるとか、避難する時とかに生きてくるのです。

### 【明確な戦略・戦術を】

さてそこで、子どもが減っている、ボーイスカウトの数も減っている、地元の子どもの団体の活動も減っている中で、どうしていけばいいのか。

ボーイスカウトに加入する人を増やすにはどうしたらいいと思いますか。何が必要ですか。どこに手を打てばいいのですか。

ボーイスカウト制度を生み出し、立派な理念を受けて北海道の団として、どういう理念で北海道のボーイスカウトを育成していくのか。まず理念をみんなで確認して、それから北海道の団としてどういうビジョンを持っているのか。そのビジョンに近づけるためには九州の福岡や佐賀と違って、あるいは四国と違って、北海道らしいボーイスカウトの団というのは、どういう特色を出せるのか。どういう姿を見せることが出来るのか。

この理念・ビジョン、そのための戦略としてどうするのか。戦略があったら、戦術としてどういう戦術があって、それを実現させるための計画をどうするのか。

常に理念があって、ビジョンがあって、戦略がなければいけない。今までやっているのは、ほとんど戦術だけでどうするかこうするかでやってきていませんか。

ボーイスカウトが伸び悩んでいるとすれば、どうしてですかね。畑に種を蒔いて収穫するためには最初に何をやるんですか？

耕す。土づくり・土壌づくり。土壌が出来たら、耕して、植える状況をまず作る。種をまきますよね。植える状況を整えて。種をまいたら芽が出るのもあるし出ないのもある。まずそこでしょ。

ボーイスカウトの活動をもう一回甦らせるとしたら、その土壌づくりをどこに求めていけばいいですか。種になるのは、何を考えればいいですか。

とにかく人間というのは、感性が瑞々しいうちに様々な体験活動をさせるとすれば、ボーイの土壌はどこだと思います。

感性が瑞々しいうちに、ボーイスカウトの体験をずっと根付かせていくとすれば、小学生や中学生にターゲットを当てるのではなくて、今一番必要なのは保育所とか幼稚園に皆さん方が入り込むことです。幼稚園や保育所では年間いろんな体験活動をしています。その体験活動を皆さんが担うことです。

幼稚園の園長先生と話し、保育園の園長先生と話して、秋の体験活動の時に私こういう事を一緒にやらせてください、冬の体験活動も私達こういうプログラムを持っています、皆さんの園児と一緒にこういうことをやりませんか。そういう事を園児がボーイスカウトのおじさん、おばさん、あるいはボーイスカウトに入っているお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが来て「やってくれた」という思いを幼稚園児や保育園児に持たせることです。それが土壌を耕すことです。

その子たちが小学校に行き、中学校に行ったらボーイスカウトに必ず入るかといえば、そういう保証はないけれども、幼稚園の時にそういう人たちと関わったという感覚と想いはずっと残っているはずですよ。

それが後になってどこかでその子が大人になって、じゃ私もあの頃幼稚園で体験したボーイスカウトの活動をやってみようか、そこから加わったっていいじゃないですか。あるいは結婚して出来た自分の子どもにそういう体験をさせてみようかという、まずそういう種を蒔く事から始めるべきです。

この理念・ビジョン・戦略・戦術・計画というのが、本当にいろんな所できちんとして行かなければいけないのです。

最初に申し上げたように、今どんどん衰退していく地域コミュニティを作るその核は、大人ではなくてやっぱり子どもなのです。子どもを核にしながらか大人がどういう知恵を出して様々な世代を結び付けていくことが出来るかということで、私も恵庭でいろんな世代交流のためにボランティア活動をしているのは、子どもたちがこの恵庭に育って良かった、私のふるさとには恵庭なのだと思える子どもを少しでも育てていきたいと思っています。



## 講義

### 「ボーイスカウト教育法」～まずは班制教育から～

北海道連盟コミッショナー 扇間 康弘

#### 【パトロール・システム研修会にあたって】

小山先生から体験活動の重要性、地域社会を巻き込んだ取り組み、あるいは募集の方法など、今ボーイスカウトは地域社会や少年団体活動において、重要な位置にあるということのお話を色々いただきました。

今日はボーイスカウト独特の教育法「班制教育」「パトロール・システム」と呼んでおりますが、これに特化して研修を進めていきたいと思えます。

小山先生のお話の中で、文科省の中央教育審議会の答申について触れられましたが、この答申では

「昔の子どもたちは成長していく上で自然体験あるいは社会体験を日常的に積み重ね、成長する機会に恵まれていた。しかしながら今の子どもたちの環境というのは、どうも心や体を鍛えるに負荷のかからない「無重力状態」である。」と述べています。

今の社会では青少年に「きっかけ」を与える場所が必要であり、その役割を果たすボーイスカウト運動は大変重要な位置にあると云われています。

文科省のホームページを開いて、平成25年1月25日の中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について」(答申)を参考にされることをお勧めします。

#### 【私のスカウト体験談】

私は小学校2年生の時に母親の「隣のお兄ちゃんの制服がかっこいい」という強い憧れから、無理やり手を引かれ連れて行かれたわけですが、当時の活動は良く覚えていませんが、ボーイに上進して6年生の時にやらされた飯炊き、水汲み、食器洗い、後片付けなどが印象に残っています。

班集会は班長の家でやっていましたが、班が独立して物を決めたという作業ではなかったですね。計画が出来ている物に参画した。いわば自治のグループではなかったように思います。

日本のボーイスカウトはおそらく、そのような活動を続けて来たように感じます。小山先生がおっしゃっていたPDCAサイクルがきちんとできていなかったのが事実でしょう。

当時はベンチャーではなくシニアと言いましたが、リーダー的な存在でした。今でも上級班長、隊付という呼称はもちろん残っていますが、活かされていない現実が多分にあると思えます。

このパトロール・システムについてプロセスをしっかりと考えていかななくてはいけません。



## 【日本のボーイ隊の現状】

今のボーイ隊の現状ですが、1隊に5～6名が現実です。班数にすると0.84班と1個班にも満たないのが北海道の現状です。一番多い山梨県でも1.81班、東京では1.34班と全国的に2個班ないのが実態です。

パトロール・システムと言っていますが、その前の段階じゃないかとも強く思います。

この班制教育というのは班同志のライバル意識や団結力・班の協調性を養うのには、複数班が必要と思いますが、個々のスカウトを成長させるという意味では、班員が2人でもこの2人で何をやりたいかを決めプログラムを作成し、準備をし、運営をする作業は2人であってもできる訳です。

また、複数班で運営する方法として、旭川地区で行っていますが、A団とB団のボーイ隊合同で活動を行い、A・B両団のボーイ隊を班として2個班を形成し、両隊の班長が集まって班長会議を行う。そして隊へ帰って班集会をし、両団合同で集会（隊集会）をする方法もあります。

ただ気をつけなくてはならないのは、どちらかの隊の指導者に偏る可能性と元に戻せない状況が出てくる。これはどちらかの隊を潰し兼ねない問題になる可能性がありますので、毎回というよりも一年に2回程度と決めた方が良くかもしれません。

2人でも企画 ⇒ 計画 ⇒ 実施 ⇒ 展開 ⇒ 評価 ⇒ 反省というプロセスはできる訳ですから、あまりにも複数班を意識しなくても良いと思います。

## 【指導者としての少数スカウトの扱い】

私の指導者経験の中でもスカウトが1人しかいない時代がありました。次年度に4～5名の上進スカウトがいるのがわかっていたので、班長に育てるという目的とこのスカウトのニーズをどう生かして行こうかと大変悩みました。

どうしたかという、私自身の思いは抑えて、彼の意見に耳を傾け、彼の意見を拾って年間プログラムをつくり、2人で準備をし、登山へ行ったり、キャンプへ行ったり、また、2人であるためスカウトスキルも一緒にやりながら教えることができました。

次の年にカブから上進してきて、ある程度、自信を持って班長をスタートしました。1人でも継続して活動をしていたからこそ辞めずに1年間過ごせたのだと感じます。活動を休止したり辞めたりするのは運動を停止させ、継承することができなくなります。

おかげさまで今ではスカウトが全部で40名程の人数にもなりベンチャーもジュニアリーダーの意識を持つ状態までになりました。

ちょっと話はずれますが、昨日の中期展望の討議で様々な問題が出されました。

ある県連盟の団において、保護者と指導者とスカウト間において大きな問題が起きてスカウトの大半が辞めたという状況があり、私の知り合いが団委員長を頼まれたそうです。

彼が何をしたかと言いますと、指導者を全員、首にしたそうです。根っこの問題は指導者の問題という事なのですね。一年間団を休んで指導者育成に専念し、立て直したようです。この方法が良いか悪いかわかり

ませんが、根本的に指導者の対応、保護者へのサービス、スカウトへのサービス、プログラム提供というところが大きな問題となってこのような現象を起こしたという事ですから、大きな改革を考える必要はあるという事ですね。

### 【日本連盟のプログラム見直し】

日本連盟では、平成28年を目指してボーイ隊の年齢幅の拡大という見直しを検討しております。

ボーイ隊の少人数隊の増加と、ベンチャーのプロセスの在り方の問題を含めて12歳～18歳の年齢幅で一つの隊にしようという動きですが、ただこの年齢幅で班を形成するという意味ではなく、現ベンチャー年代については、ジュニアリーダーの位置づけを強調するという意味です。

ボーイスカウトの部門が3歳～4歳の年齢幅で構成されているのは重要な意味があります。4年間というのは自身が経験したことを記憶している年数であり、その子の立場になって考えることができる年数であるとされています。

ベンチャーにジュニアリーダーのプロジェクトバッジができ他隊の活動を継続的に支援するという項目があります。ボーイ隊はもちろんカブ隊・ビーバー隊への奉仕を積極的に推奨し、ベンチャー年代にリーダーシップ・メンバーシップといったスキルの向上を提供すべきだと個人的には感じております。

そしてボーイ・ベンチャーを統合した際には、初級から富士章までをシームレス化をする。他隊の奉仕をしながら進級課目に挑戦するという事になると思います。

ボーイ年代後半から高校生の時点で入隊してきたらどのようにするのかという問題もありますが、そのようなことを含めて検討している途中です。

まだ口頭でしか進行状況を説明できませんが、地区内でも論議する場を設け、意見をあげて頂ければと思います。

### 【世界スカウト運動の方針】

ボーイスカウト講習会、ウッドバッジ研修所などで何回も目にしていますが、「世界スカウト憲章」をもう一度、読み直してみましよう。

#### 【世界スカウト憲章】

##### 第1条

定義 スカウト運動は、創始者によって考案された目的、原則、方法、及び以下に述べる事項に従って、性別、出生、人種、信条の区別なく誰をも対象とした青少年のための自発的で非政治的な教育的運動である

目的 スカウト運動の目的は、青少年が個人として、責任ある市民として、地域、国、国際社会の一員として、自らの肉体的、知的、情緒的、社会的、精神的の可能性を十分達成できるように青少年の発達に貢献することである。

### 第3条

方法 スカウト教育法は以下の項目を通じて行われる段階的な自己教育システムである。

- ちかいとおきて
- 行うことによって学ぶ
- 小集団の一員となる（例：班）。  
これには、成人の指導下で、進歩的な責任受容、性格発達に向けた自己抑制訓練、能力取得、自立、信頼性、協力と指導両方の許容力を伴う。
- 自然と触れ合える野外環境での、ゲーム、実用的技能修得、地域社会奉仕などを含む、参加者の関心に基づく様々な活動の進歩的かつ刺激的なプログラム。

この「世界スカウト憲章」の条文を、「班」にこだわって確認をしたいと思います。

「定義に」記されているようにボーイスカウト運動は『青少年のための自発的で／教育的運動である』だから子どもたちが出来る、出来ないではなく、そのきっかけを提供していかなくてはいけないのが私たちの責務なのです。

隊長・副長が「はい集まって今日は手旗やるよ」とか「はい今日はロープやるよ」とかみんなを並べて教えるのは、自発的活動とは言えないわけです。

ボーイのプロセスで言うと班集会があつて、班長会議があつて、班長訓練があつて、班で練習する班集会があつて隊集会があるというプロセスになっているのです。

このプロセスを行うことによって「班制教育」が自然に生きてくるようになるのです。

自分たちで相談しなきゃいけない、自分たちで考えなきゃいけないというきっかけを提供するのが私たち指導者の一番の仕事だと思います。

「目的」に、『青少年の発達に貢献する』と記されているように、「青少年は個人として成長する」のです。

定義の中でも話しましたが、みんなを集めて手旗やロープを教えるのではなく、自分がやろうとして、進級しようとして、自分がそれにトライする個人的な作業を個人が行わなければ個人の成長はないのです。

そのためにはみんなが集まっているんな話をし、そんなのいやだとか、そんなことは許せないとか論議しながら一つの物事を進めていく作業は、大人の世界でも難しい作業です。

相手の気持ちを汲み取り、自分の意見も聞いてもらうこの作業が個人の成長に結びつく方法であり、いわば人間関係コミュニケーションの大きな勉強の場所であります。

「方法」は、ちかいとおきて、行うことによって学ぶ、小集団の一員、これがまさしく班制教育なのです。

#### 【日本連盟の目的と基本方針】

日本連盟教育規程においても、世界機構の承諾のもと日本向けの文言に変えて「目的」では『青少年がその自発活動により』と、「基本方針」では、指導とは言わず『成人指導者の協力によって』と記載されています。

## 日本連盟の目的

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟は、ボーイスカウトの組織を通じ、青少年がその自発活動により、自らの健康を築き、社会に奉仕できる能力と人生に役立つ技能を体得し、かつ、誠実、勇気、自信及び国際愛と人道主義を把握し、実践できるよう教育することをもって教育の目的とする。

## 日本連盟の基本方針

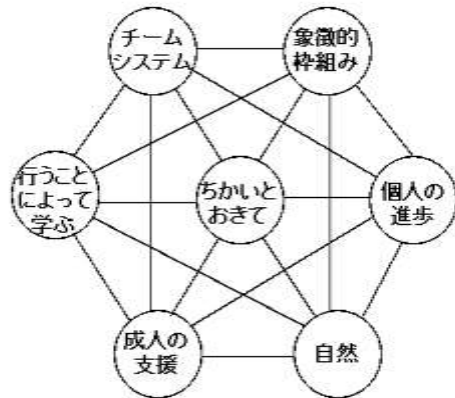
ボーイスカウト運動は「ちかいと「おきて」の実践を基盤とし、ベーデン・パウエルの提唱する班制教育と、各種の進歩制度と野外活動を、幼年期より青年期にわたる各年齢層に適應するように、ビーバースカウト、カブスカウト、ボーイスカウト、ベンチャースカウト及びローバースカウトに区分し、成人指導者の協力によってそれぞれに即し、かつ、一貫したプログラムに基づいて教育することを基本方針とする。

### 【「教育の4本の柱」と「スカウト教育法7つの要素」】

ボーイスカウトの教育は、人格・健康・知識と技能・奉仕の『4本の柱』のもと『7つの要素』がすべて噛み合っただスカウト教育法とされています。

### 教育の4本の柱

人格を高める	健康づくり
知識と技能づくり	奉仕を通じての実践



### 【チームシステムとは民主的な協力関係である】

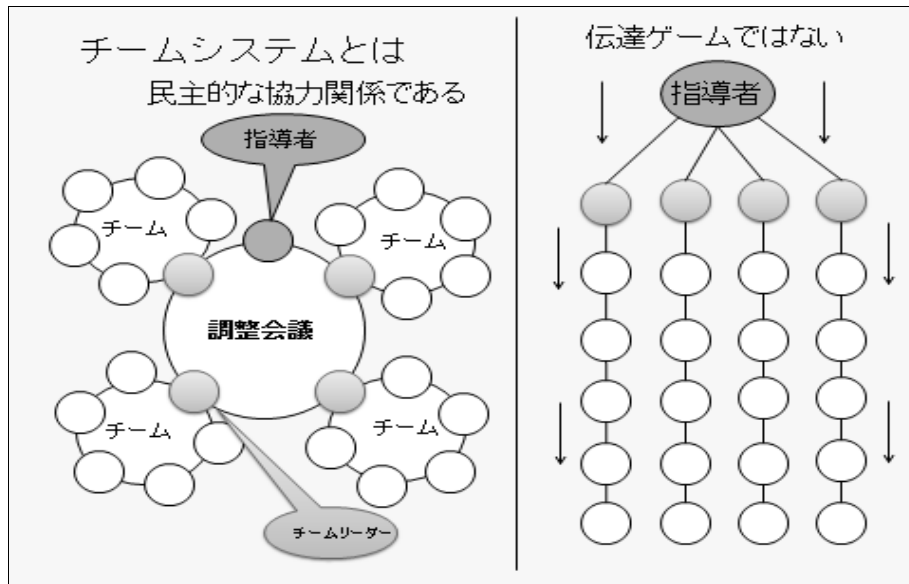
チームシステムは、自立した活動です。

チャートでどっちが正解かもう見てお分かりだと思いますが、右側は指導者が「みんな集まれ、今日は手旗、今日はロープをやるぞ」とスカウトを並べて指導するので、教育にならないですね。個々の教育にもならずただ伝達作業をしているだけです。

左側は、調整会議と書いてありますが、いわば班長会議です。チームリーダー（班長）が集まって班長会議をし、班長が責任をもってチーム（班）会議で伝達をし、準備をする。

班長にとって、リーダーシップの発揮の場であると共に、班員にとっては、切磋琢磨し、みんなの意見をまとめ、役割分担をし、みんなで協力しながら進めていくのが大事ですね。

そうは言っても今の中学生には難しい現状にはありますが、この作業を経験させないとこの班制教育はあっても無くても良いことになりすし、ボーイスカウトとは言えなくなります。そのような現状から年齢の近いベンチャー年代の導入も一つの方法です。



### 【県コミの立場での検証】

私は、県コミSSIONナーに就任して8年目になりますが、ボーイスカウトの教育面・プログラム面について、日本連盟と論議をしたり、提案をしたりという場面が多いもので、実際にそれらを検証したいという思いが常にあります。それをどこで検証するかというのは自団しかないので。

ボーイの出席の悪い理由に塾・部活・スポーツ等が良く言われますが、子どもたちが出席出来るようにするためには、子どもたちが来たいという意思を持っている以上は、出席できる方法を子どもたちと一緒に考えて、夜なら出席できるという意見から13年前に班集会は一泊としました。

それぞれのスカウトが出入りをしながらも班集会の出席は良くなったのは事実です。またカブスカウトから見てもボーイになったら毎回泊まれるという単純な魅力も上進率アップになりました。

先ほど話をしていましたボーイとベンチャーの統合についても昨年の9月から実際に行っています。ボーイとベンチャーの隊長は兼務し、ボーイの運営は、ベンチャーが行うようにしています。

ベンチャーにはしっかりとボーイ隊の運営方法を一泊で説明し、今はローテーションを組み行っています。今までは、ベンチャーで集会を持っていましたが、これと目に見える活動はありませんでした。ボーイと共に行動ようになってからは、ボーイの集会へも出てくるようになり、班長をまとめています。

隊長が直接班長会議を行った方が早いのですが、ベンチャーを中に挟むことでベンチャーにもボーイにも教育という意味では効果的であるように思います。

また、ボーイ隊だけでなく、ビーバー隊、カブ隊に奉仕するよう推奨しています。今うちの団はそんなシステムで運営していますが、どうも進級に関しては、意欲が無いとは言いませんが、意欲は薄いですね。

カブはお母さんと指導者が一緒になって協力して取得するのですが、ボーイ以上は、特にベンチャーは意欲に欠けます。この教育運動の方法に忠実にプロセスを大事に行い、班長にも進級は促しますが、自治グループで行うことで満足感があるのかもしれませんが。まあ進級は一つのツールだからいいかとも思った

りしています。もちろん、進級意欲は持ってほしいのは事実ではありますが・・・

ターゲットや進級は、個人が一生懸命行い個人の成長の大きな目的でもあります。年代を通じて落とし込みをしていくというのは大変な作業ですけど、これが班制教育なのです。

昔のうちの団も、隊長がスカウトを集め今日は手旗と言ったら2時間の集会のずっと手旗。次の週の集会の時間ずっとロープを行う。スカウトがみんな並んで。僕もその頃から疑問に思ってきたというのが事実です。

その間に保護者の間に派閥が出来たりPTAと混同して、訳が分からなくなった状態が続き10名まで落ちてしまいました。自分のところでそんな経験をしてきましたので、子どもたちの個々の成長をするために大人は指導、指導者と言っていますが、やっぱり支援者であるべきだし、きっかけを提供する立場にいるということです。

ベンチャー年代だから自分で出来るはずだから自分でやれ、というのみではなくて、今の社会の中ではやはりベンチャー年代でも大変難しいという現状にあります。

そして、班集会在メインになっていて、自治グループで運営しているところは、内容はともかくボーイスカウトらしさは感じます。

### 【チームシステムとは】

チームシステムの意図とすることは、そのチームで切磋琢磨することによって知的能力だとか、体験的経験を活かして話し合い、自分達でプログラムを組み立てていく。そして、そこでチーム・班の団結力を作っていくということです。

スカウトたちは、異年齢集団で女子スカウトもおり、しつけの問題や自分達でルールを決めて、生活も運営していくというような作業を決めていくが、時には大人として指示をしなきゃいけない場面もありますが、大人の方から「こうやれ」じゃなくて、「自分達で決めなさい」という作業をしていかなければいけないのです。

ここに班の団結力、班制教育ということであり、一番重要なのは班長のメンバーシップやリーダーシップの育成です。

では、どのように展開するのか。

班集会在での意見をもとに、班長会議でリーダーと班員の意見を吸い取ってどのように展開していくのか、また必要な技能を班長に支援して、また班集会上に戻っていく流れのシステムを作っていく作業をしていきます。

青少年と成人との協力関係は、「指導する」というのとはニュアンスはちょっと違い「きっかけを与える」「支援をする」立場にあるのです。

段階的な自主運営と言いますが、ビーバー・カブで班制教育といったって無理です。

でも、例えばビーバーに「何々さんこれ必要だから、水筒だけ持ってきてね」と頼むのも、これも一つの段階的な自主運営で、カブになったらもうちょっと個人に責任を持てるような事を頼んでみてはいかがでしょうか。

ボーイに「自主的にやれ」「自分たちで準備せい」などと言い、「分かりました」と言っても実際にキャンプで現場に行ったら鍋持って来ていないなど、うちの団ではしょっちゅうありますよ。でも指導者は絶対その忘れた鍋を取りに行きません。何とかせいで。お前らが準備したんだから、俺は知りませんって。

民主的なシステム。要するに、子ども達が自分達で自治グループを形成していくということでもあります。

その中で、要するに役割を分担してやって行くんだということ覚えさせることです。

チームシステムで、調整会議というのがあります。これはボーイスカウトで言えば、要は班長会議ということになってくるかと思います。

### 《「スカウト隊総会」のすすめ》

あまり耳にしないことだと思うのですが「スカウト隊総会」、これは僕ぜひやるべきだと思います。

団の総会はやっておられると思います。僕らは子どもたちに責任を持つきっかけを与えて、班で動くというシステムを教育として与えていますけど、大人がどこかで確認の作業をしなければ絶対ダメなのです。

在籍するスカウト全員とボーイ隊の隊指導者が全員集まって全員で意見を聞くという、ボーイ隊の隊総会というのを是非やってほしい。その時は、隊長も副長もスカウトも全員、班は関係なく集めて一人ずつ、今年プログラムはどうだった。

例えば、「月のプログラムどうだった」「班はうまくいっていたの」など、みんなに意見を求めるという作業は大変ですが、指導者として、子ども達のことを把握するという意味では重要なプロセスです。

あまり出て来ていない言葉だと思います「スカウト隊総会」。

ここでは、スカウト隊全員で集まって、普段は班としてやっていますけども、全員が集まって意見の交換をして、「あいつはこんなことをしていたんだ」、「あいつはこう思っているんだ」、「あいつはこんないいこと思っているんだ」というようなことを、ここでみんなが共有する場として「スカウト隊総会」の開催をお奨めします。

スカウトたちが、他の隊・団やメンバーと共同作業する経験をする機会が重要です。

年下の子から憧れをもって、見られることも含めて、あるいは自分がリーダーシップを付けるという上では大変な教育的効果のある作業ですので、ベンチャーがビーバーを手伝うとか、カブを手伝うとか、ボーイを手伝うということをして是非やってみてください。

ボーイスカウトの各部門で年齢幅の限定をなぜしているか。自分が頭の中で経験として思い出し、その経験を言葉にして出せるというのが、やはり4年スパンという年数であるというふうに言われています。

ですから、その年数幅というのを認識しなければならない。私達指導者、おっさん・おばさんがね、世

界や育った環境が違う中学生を捕まえて、直接対応するというのはお互いに分からない相手の立場なので、年齢幅限界を知ることは大変大事なことです。

ゲームの話とか、テレビの話聞かされてもちんぷんかんぷん、ついていけない。でも、スカウトたちと付き合うにはついていける年代じゃないとダメなのです。

高校生年代のあのスマートなベンチャーの方がボーイやカブ・ビーバーと付き合った方が、見た目もかっこいいじゃないですか。

このようなことが、チームシステムの要素なのかなと思います。

僕の思いもかなり入っていますが、今すすめたいのは、やはり大人も把握しなきゃいけないから「スカウト隊総会」、表現がいいかどうかは別として、というのをやると強く感じています。

最後に「チームシステム」について概要をお伝えしますので日常の活動の中で、この「チームシステム」を意識することにより、効果的な隊運営の参考にしてください。

#### 【チームシステムとは】

- ① 意図すること
- ② どのように展開するか
- ③ 青少年と成人の協力関係
- ④ 段階的な自主運営
- ⑤ 民主的なシステム
- ⑥ 本当の責任を伴った各人の役割
- ⑦ 調整会議
- ⑧ スカウト隊総会
- ⑨ スカウト隊の他のメンバーとの共同作業を経験する機会
- ⑩ 年齢幅の限定
- ⑪ プログラム提供との関係
- ⑫ プログラム実施との関係

#### ①意図することは

- ◇ 各自の技能、知的能力、経験を出し合ったり、組み立てたりすることやお互いに支えあう団結心を伸ばすことを通して個人と集団としての適応力を発展させる。
- ◇ あらゆる冒険をともに分かち合っていく結果として、長い時間をかけて強化する相互信頼に基づい



て他の青少年と成人との建設的な協力関係を築く。

◇ 成人が協力する中で民主的な自治の形態に従って生活することを学ぶ。

青少年が意見をまとめたり、紛争を解決したり、自分の意見を述べたり、他の人の意見を聞いたりする経験、決定を下すこと、結果を受け入れること、協力と分担、率先して行動すること、指導すること、責任をもって最後までやり遂げることを経験することを可能にするものである。

◇ 小集団を形成することにより、個々の技能、能力および経験を発揮することができ、またお互いに助け合う団結心を伸ばすことができ個人、集団の成長を発達させる。

異年齢、異性別でチームを組むことにより、経験の伝達や思いやりおよび先輩者への憧れなどを体感できる。

役割を分担し、活動に取り組むことで自分自身の必要と責任感を感じることができる。チームリーダーのリーダーシップ、メンバーシップを養うと共に達成感を味わうことができる。

チームが複数のチームで構成されるならば各チームにライバル意識、競争心が生まれチームの団結心がより強くなる。

しかし、チームリーダーの責務は容易なものではないため成人指導者あるいはジュニアリーダーがチームリーダーの立場になって支援しなければならない。

ジュニアリーダー（高校生年代）においては成人指導者が具体的なアドバイスを提供しなければならない。

## ② どのように展開するか

◇ 小集団の人たちといつもこの経過に加わっていると青少年たちは、お互いの長所や短所がわかるようになり、彼らの間に絆が生まれる。

◇ この絆によって、帰属意識（属してつき従う）や感謝されているという感情、そして他では作れないようなある種の親密な友情の基盤、情緒的な発達が促される。

◇ 集団が固く結ばれることで、青少年は自分たちの活動やともに生活するのに必要な技能や経験を得るのにもっと努力しようという雰囲気生まれる。青少年が経験を蓄積できるようになればなるほど挑戦し、意義ある経験をする機会が増える。

◇ この絆によって、青少年に責任と連帯の意味をより深く理解するようになる。

◇ 仲間から好意を持たれたい青少年は、自分の態度や行動について集団の行動を観察して、自分が相手にどう見られているかを知るのである。こうして青少年は自分自身を認識することができるようになる。

◇ 少人数の場合、年長者がふつうチームリーダーになるのでしょう。これもスカウトの選挙で決める

べきです。少人数であってもそのメンバーにてプログラムを企画し、計画、実行までのプロセスを経験させることが大事なことです。

たとえ2人であっても3人であっても相談して考えることはできます。

少人数であると意見は多人数よりもまとまりやすいはずですが。

班長会議、班長訓練、班集会、隊集会のプログラムプロセスについても個人を成長させるという意味では省略せず行うべきです。

ケースによっては指導者あるいは高校生年代が班長役になっても良いでしょう。

既定の人数編成は個人の成長のためにももちろんプロセスを踏まなければなりません。

パトロール・システム（班制教育）という名前の通りです。

極端な話スカウトが1人でも同じです。

指導者あるいは高校生年代が班長になり彼のニーズをくみ上げプロセスを消化する流れはなんら変わりありません。但し競争心を養うことができませんので、他隊の集会に入れてもらうのも一つの方法です。

これは班を作れば良いというのではなく、自治グループでプロセスを踏まなくては班制教育とは言えない。

原則から少しでも外れるとスカウト教育と言えないことになります。

### ③ 青少年と成人との協力関係

◇ チームシステムは、成人指導者が青少年に命令を下して実行させるための方法として用いるものではない。

◇ また、青少年が自分の希望を述べ、成人指導者に自分たちのためにすべてを準備してもらおうと期待する方法として用いようとするものでもない。

◇ 成人指導者は、スカウト隊の構成員ではあるが、スカウト隊の一員ではない。彼らの自主性や連帯感、責任、約束を守るといった資質を発揮し、発達させるのに 特定の役割を果たすためのスカウト隊の一員である。

◇ 通常チームを形成するのは、3～4歳の年齢幅が良いとされています。

それは、3～4歳前からの自身の成熟度を本人が記憶しているからと言われています。

それ以上年が離れると共通するものがほとんどないと感じるためです。

したがってボーイスカウトでいう小学校6年生～中学校3年生のチームが望ましく、中学校2年生、3年生を支援するのは高校生年代がふさわしいという事になります。

成人指導者はジュニアリーダーとなる高校生年代を支援することが最大の仕事であると思われれます。

年代の違う成人指導者が高校生年代を支援することは容易なことではなく、成人指導者自身が高校生

年代とのコミュニケーションを円滑にするためのコミュニケーションスキルの修得と自覚が必要である。

この方法について、アサーション、コーチングスキルでいう人の話を聞けること、高校生年代の意見を聞けること「基本原則」やボーイ隊のプログラムプロセスについてはわかりやすく、どういう意義があるかを含め伝達できることが重要な要素である。

3～4歳の年齢幅を基準として考えるとボーイ隊12～15歳までをベンチャー年代16～18歳の年代が支援し、ベンチャー年代をローバー年代18～25歳の年代が支援することが望ましい。

成人指導者は、ローバー年代を含め、若手指導者を支援できるコミュニケーションスキルを保持しなければならない。

#### ④ 段階的な自主運営

- ◇ 青少年の成熟度、8歳～10歳、11歳～14歳、15歳～18歳の集団は異なっている。この発達の段階を踏まえ、運営に関わる度合いを大きなものにするが良い。
- ◇ 青少年プログラムの立案は各年齢別部門の運営組織の自主運営の点で進歩をもたらすものでなくてはならないが、例えば、低年齢部門では、軽い飲食物を持っていく責任とか、活動に必要な材料を覚えておくとか、中年齢部門においては、チームの予算を管理したり、食糧調達に責任を負ったり、チームの日誌を作るなどの責任が良い。

#### ⑤ 民主的なシステム

- ◇ 全ての者のニーズや興味を必ず考慮する。これは合意が得られるように努力しなければいけないということ、すべての決定が多数決で決定されるなら、少数のニーズや興味は無視されることになる。
- ◇ スカウトの「おきて」に基づいて、みんなが同意した規則を作る。
- ◇ スカウト隊は一人ひとりを支援し、確実に効果的に機能するために責任を分担し、その改善に向けて貢献する。

#### ⑥ 本当の責任を伴った各人の役割

- ◇ 民主主義は青少年がチームの中で対話と協力することを学ぶことから始まる。
- ◇ チームシステムを構築するには、確実に各人が自分の役割を果たさなければならない。
- ◇ 責任は青少年の発達と経験の程度に合わせなければいけない。新しく入ってきたものには、複雑なものにしないこと
- ◇ チームリーダーの役割、チームリーダーはチームをまとめ、メンバーがしたいことで合意をし、チー

ムリーダー会議にチームを代表して出席し、活動を調整する。チームリーダーの任命も民主的な手順で選考する。

#### ⑦ 調整会議

◇ この会議はチームリーダーと成人指導者で構成される。活動の計画や編成を決定したり、問題点を議論したり、スカウト隊の業務の調整などをする機会である。

#### ⑧ スカウト隊総会

◇ スカウト隊の集会では、青少年の全員と成人指導者が活動の結果を議論をしたり、評価したり、集団生活を評価したり、修正すべきことの合意を図ったり、もちろん達成したことを祝ったりというようなこともできるように運営組織の計画に組み込まなければいけない。

◇ スカウト隊全員の結束 チーム内の結束だけではなく、キャンプや奉仕活動など、チームが一緒になるための時間と場所も入れながら、スカウト隊全体のものを計画に組み込まなければならない。

#### ⑨ スカウト隊の他のメンバーとの共同作業を経験する機会

◇ これには単に一時的に特別作業チームを編成する機会を立案する。

#### ⑩ 年齢幅の限定

◇ 一般的に、チームシステムは、チーム内の最年少の者と最年長の者の年齢差が3，4歳である時もっともよく機能するといわれています。

◇ 年上の者がその年下の者の年齢であったときからの自分自身の変化を実感できる年齢差である。

◇ 年齢幅が大きすぎるとチームシステムの教育的効果は著しく低下します。  
これは共通するものがほとんどないと感じるためです。

◇ 年齢幅を限定しているのは年齢別部門の数や年齢幅全体と密接な関係があるのです。

#### ⑪ プログラム提供との関連

◇ このチームが民主的な自主運営のシステムとして機能するための者であることを理解すること。

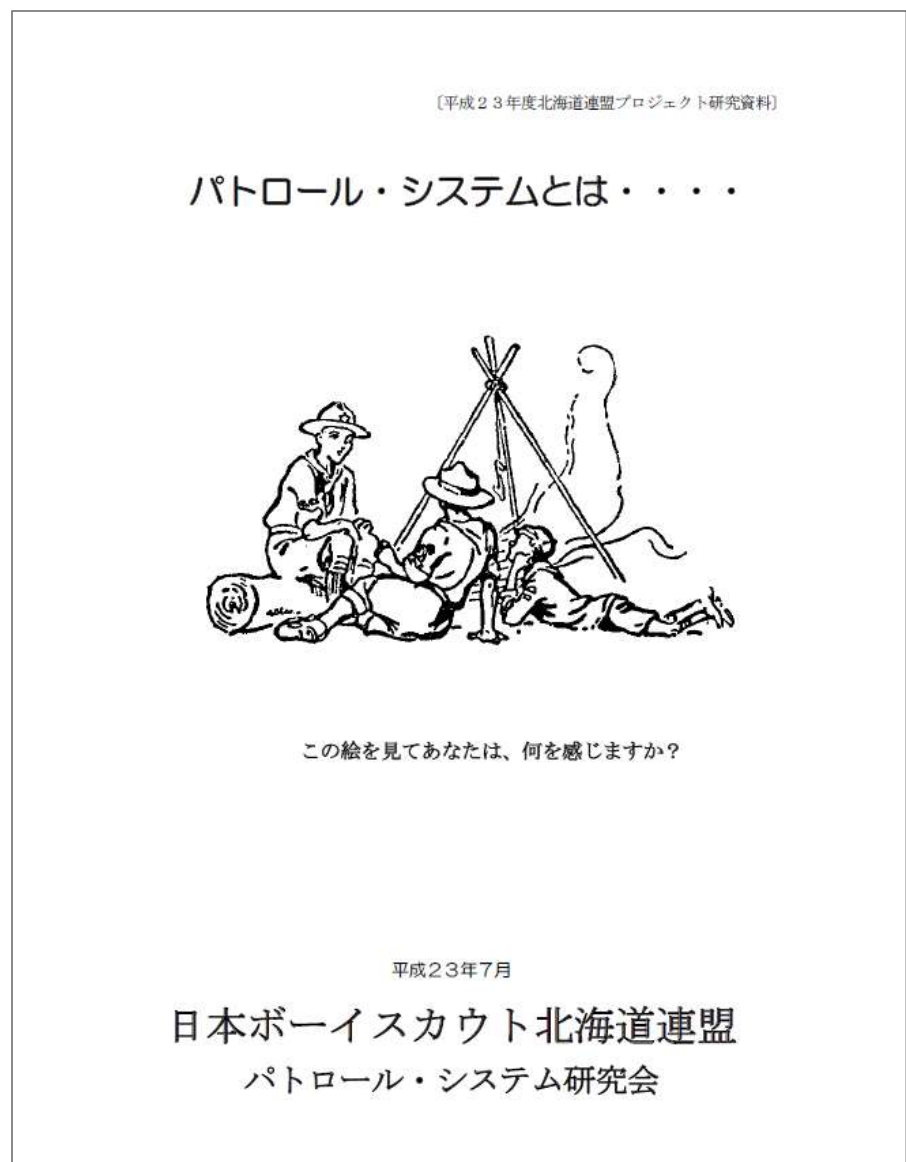
◇ 彼らがしたいと思っていることのアイデアを豊かにできること。

◇ 肉体的、情緒的な安心感を保障する。

◇ 青少年に期待できる以上のことを押し付けないこと。

## ⑫ プログラム実施との関係

- ◇ 新人が溶け込めるようにする。
- ◇ チーム内での責任を確立する。チーム内で役務分担をし、その役務が固定されるものではなく新しい役割を経験できるようにする。
- ◇ 思いつきで与えられたものであれば「雑用」でしかない。
- ◇ チームリーダーというものは自分の意思を押し付ける者のことではない。  
メンバーの意見を聞きどうすれば機能するかを調整する。



## ワールド・カフェ

テーマ：どのように「パトロール・システム（班制教育）」を推進するか  
～自隊での現実を見つめて、他の隊を参考に～

\* ワールド・カフェとは、“カフェ”にいるようなリラックスした雰囲気の中、参加者が少人数に分かれたテーブルで自由に対話を行い、ときどき他のテーブルとメンバーをシャッフルしながら話し合いを進展させていき、相互理解を深め、集合知を創出していく手法で、全国ユースフォーラムでも活用されています。

### 【討議の要旨】

- ◇ この人数の少ない状況で班の体制が何とか出来ないだろうかという話の中で、役割を与えると出席率が良くなる。  
それぞれの役割をしっかりと持つと責任分担の中で、その集会に行くたびに私は何をやらなきゃならないと思う、その責任感を持たせることが大切。
- ◇ デンコーチとしてボーイの方から行って集会のお手伝いをするにより、そのスカウトにとっても一つの役割が出来るので、この班制度、組制度の中でうまく活用でき、子ども達の自覚が芽生える。
- ◇ 団のプログラムがどうしても行事化している。これをなんとか打破するため上の方から決められてきた行事化したプログラムを、班制度の中ではもうちょっと噛み砕いて目的をしっかりと考えて班に落とし込む作業が必要。
- ◇ ちゃんとしたスカウト活動をするために、一人でもスカウトを増やしていくためにどうしたらいいのかなどを話していくと負の連鎖が始まってしまったが、これの反対が必要なのではないか。
- ◇ 地域に対してボーイスカウトの人気のない。親自体が集団活動の経験がないので、ボーイスカウトってこんないいところがあるんですよって親がアピールしてもなかなか理解してもらえていないのが現状。
- ◇ ボーイスカウトに対する憧れを持っていただいて、地域にアピールする機会があれば、いろんな部分でスカウトが増えたり支援する声も出てくるんじゃないか。
- ◇ ビーバー・カブ年代だと親がリーダーだと行くよって無理にでも連れていくことが出来るが、ボーイくらいになるとなかなかうまくいかない。これがダメ、あれがダメという話ばかり多く出たので、逆にこれを逆手にとって反対の考え方をした方がいいのではないか。
- ◇ 班はあるけれども班長や次長の意識がない、上下関係、みんなお友達のような先輩も後輩もない、みんな横一列でお友達だと。仲が良いのはいいが区別・けじめがない。
- ◇ 1泊2日で隊集会をやっているが、みんな入れ違いで全部揃うことは絶対ないことがかなりあり、全部集めて揃うのを待とうなんて思ったら絶対スケジュール的に無理だというのが、やってみてわかった。
- ◇ 1泊の集会なので集合場所をスーパーに集めるようにして、集まったところでそれぞれの班で今日の献立をそれぞれ考えて買い物をするようにした。  
最初は結構混乱するが、何回もやっているうちに班の中で連絡を取り合って何食べたいとか、俺行かないけどこれを作ってくれとか、そういう事をやる班が出てきた。  
これをやっているうちに、たぶんそのうち献立だけの話じゃなくて活動の方にも目が向いていくんじゃないかなと。即効性はないですけど気長にやっていると、そんなような班の意識みたいのが出てくるのかなという、今そういうふう感じている。

## ＝講評・まとめ＝

### 【扇間コミッショナー】

ボーイスカウトの募集、PRの仕方、あるいは地域への理解というのはボーイスカウトの教育方法も含めて、やはりうまく機能してないんだろうなというのが見えているような気がします。

地域社会と連携した活動やボーイスカウトの教育法で行き詰った時にはどこに戻るのでしょうか。しっかりと『基本原則』というルールがあるわけですから、そこに戻りましょう。

ボーイスカウトの教育法をきちんとやった上で、やはり外部へ向けて大きなPRをしていくべきと思います。

地区自体も2～3個団で形成しているという地区もありますが、熱意で繋がり、後も現場指導者の皆さんと交流が出来るような北海道連盟の支援体制を作っていきたいと強く思っております。

私も、団に帰ったら一副団委員長でして団では散々文句を言われていますが、これも北海道のボーイスカウトのためと思って理解をいただきますので、今後とも皆さんとお付き合いをひとつ宜しく願いたいと思います。「実践躬行」です。

### 【小山講師】

#### 〔ボランティアでの青少年教育運動〕

今更というわけではないですが、ボーイスカウト運動というのは青少年の教育運動なのです。だから単なる希望する子どもを集めて何か楽しいことをやるということではなくて、地域の中で青少年をどう教育するかという役割を隊長の皆さん方は持っているわけです。

子どもたちはそういった教育を受けながら地域社会に奉仕をする。隊長の皆さんは、そういう子どもを育てるために自分でいろんな仕事がありながら無償で、ボランティアとして関わっているということを改めて認識すべきと思います。

皆さん方が関わっていることは「ボランティア活動」であって、皆さん方の指導を受けて地域社会で子どもたちが、例えば掃除をすとか、何かをするというのは、それは子どもたちはボランティアではなくて「奉仕をしている活動」なんです。

ボランティアというのは、あくまでも自分の意思で主体的に動く、無償で動く活動がボランティアであって、今子どもたちは皆さんの指導を受けて地域の中で様々な奉仕活動をしている。

子どもたちにも「ボランティア」と「奉仕」の違いをきちんと伝えていく必要があると思います。

#### 〔社会教育を担う指導者〕

教員の免許を持って子どもを教育する教師という職業があります。それは学校という建物の中で1年生から中学3年生まで決められた教科書で、決められた時間できちんと固定されたものを教えるというのが教師の教育です。

皆さんも同じ教師の役割なのですが、それは社会という場で多様な場面で、多様な活動をその都度指導で

きるという皆さんは学校の教師と違う、いわゆるそれは社会教育という教育の営みなのです。

皆さんは、社会教育の活動をしているのだということを改めて確認をしていただきたいと思います。

今、学校がどういう状況になっているかという、教師だけではもう子どもの教育が出来ないという状況になってきています。そのためどのように解決するかという、文部科学省が地域と共にある学校運営を行う「コミュニティスクール」を全国に3千カ所委嘱しています。

何をやるかという、その学校の運営を教員だけじゃなくて地域の委嘱された人も知恵を合わせて進めていくという学校がコミュニティスクールです。

例えば、東京都の三鷹市は市内全部の小中学校にコミュニティスクールを導入して小中一貫で行い、地域の市民も入り成果を上げていますが、北海道は残念ながらまだ殆ど行われていなく、遅れている状況です。

まず皆さんがボーイスカウト活動をやる時に、先程の発表に出ていたように、ビーバーやカブがなかなか入らないという状況の中でどうしたら良いのでしょうか。市町村の教育委員会も少年教育をどうするかという同じ悩みを持っていますから、皆さん方だけで悩まないで、我々と一緒に地域の子どもたちをどう健全に育むか、お互いに連携して知恵を出し合いませんかとボーイスカウトという枠の中にとらわれなくて、地域の中で是非やっていただきたい。

それはボーイスカウト北海道連盟の活動方針にも「地域の中で開かれた」、と書かれていますから是非実践していただきたい。

ワールドカフェという方式もあまり慣れていないと思いますが、グループメンバーを交替しながらもっとどんどん意見を書き入れて、ホストの人がそれをきちんと集約して発表する。出てきたものを、次の時までにはそれをどういうふうに解決していったらいいか。その解決の方法として、すぐ出来るものと、それから少し時間がかかるものと、何年か長期的展望がかかるものに分けて、次年度のボーイスカウトの北海道の活動の中に入れていけば、一つ一つ変わってくると思います。

### 〔中期展望から可能性を見出そう〕

昨日討議されていた「北海道のボーイスカウト運動推進中期展望」を見ると、実にすべての事が詳しく書かれています。ぜひ隊長の皆さんはもう一度読み込みながら、自分でちょっとでも疑問のある所はチェックしておいてください。

この「中期展望」には、ボーイスカウトの教育運動、社会の中で子どもたちを教育するというのとはどういうことなのか、我々は何を考え活動しなければならないのか適切に書かれています。

我々は何かをしようとするとき「出来ない」と言う、特に役所はすぐ「出来ない」と言うのですが、出来ないと言ったらそれで終わりです。

新幹線の生みの親と言われている、島 秀雄さんの言葉ですが、

「出来ないと言うよりは、出来ると言った方が楽だ。出来ないと言うためにはその出来ないという条件を全部あたって、それでもダメだったら出来ないと言える、だけどそんな暇もない。



だったら出来ると言った方が楽だというのは、出来ると言えばそのためにどういう方法があるんだろうかといくつかの知恵やアイデアを出し合い、そしてその中で必要なものを選んでやれば、出来ないというよりはずっと出来ると言った方が楽だ」

ということで、島さんは東京オリンピックに間に合わせるために短期間で、限られた予算で新幹線を実現したのです。

同じです。我々は何かあると、「うちの地区は難しいんだよな」と逃げていませんか。

難しいというよりは可能だという発想の視点に立って、可能にするためにはどうするか。

いつもそういう思いでやって行けば、地域も変わるし、大人も変わるし、それから子どもたちも育っていくのではないのでしょうか。

今後とも皆さんは地域の指導者・教師として頑張ってくださいことを期待します。ご苦労様でした。



# “北海道のスкауティングを語る” つどい 2014 開催！！

## 1 趣 旨

20年度～25年度の間に、富士章・隼章の修得や各種フォーラム・事業に参加したスカウトたちが集い、それぞれが活動を通じて得ることのできた“体験・経験”の「その後の活動」について語り合い、友情の輪を広げる“つどい”を開催します。

そして、純粋で瑞々しい発想のもと「北海道のスкауティング」を語り合しましょう。

## 2 テーマ：ともに、スカウティングに若い風をおこそう～

## 3 日 時：平成26年3月22日（土）15：00～23日（日）14：00

## 4 会 場：ボーイスカウト北海道連盟会館

## 5 主 催：ボーイスカウト北海道連盟

## 6 参加者：

- (1) スカウト顕彰・隼章・富士章修得者および各種事業参加者
- (2) 道連および地区コミッショナーから指名された者
- (3) 高校3年生で4月以降に道外の大学進学や就職が決まっている者も参加可能

## 7 服装、持ち物

制服（自隊ネッカチーフ）、ベレー、寝袋、洗面具、活動着、持薬、健康保険証（写し）  
ベンチャースカウトハンドブック、筆記用具、その他必要と思われるもの

## 8 参加費・参加旅費

- (1) 参加費：無料
- (2) 参加旅費：札幌市外居住者に北海道連盟旅費支給規程に基づき支給。

## 9 参加申込：所属隊長（又は団委員長）の承認を得て3月14日（金）までに、北海道連盟事務局にFAXまたはメールで申し込む。 \*参加申込書は北海道連盟事務局に請求してください。

## 10 内 容

- (1) 運営：参加者による自主運営（含む生活管理、食事）
- (2) 宿泊：北海道連盟会館
- (3) 日程：参加者の協議により決定  
〔基本項目〕開会式、オリエンテーション、つどい総括・アピール作成、閉会式
- (4) 討議の柱：“つどい”で話し合いする内容等  
〔スカウト顕彰受章者／隼章・富士章受章者〕  
受章後、どのような目標のもと活動したか、その成果と課題は。  
〔フォーラム、各事業参加者〕  
参加したフォーラムで討議した事、各事業に参加した事がどのような思い出として残っているか。自分の生き方・考え方に、どのような影響があったのか。  
〔全体を通して〕  
ともに、スカウティングに若い風をおこして、北海道のスкауティングを語り合えるにはどうしたら良いのか。  
26年度に予定している「ベンチャーキャンプ」と「カブラリー」について、自分たちの役割をどのように果たしたら良いのかを討議して、『つどい総括・アピール』を作成します。
- (5) 討議の進め方  
フォーラムや事業の仲間が集い、思い出を語りながら楽しく討議を進めます。
- (6) 今後の展開
  - ① 本事業は継続して開催することを意図していますので、参加申込書で、「次回以降出席の有無」確認を知らせる。
  - ② 今後の展開として、ネットでの参加交流も検討されるので、メーリング参加の有無の確認を知らせる。

## 平成26年度 主な活動・事業予定

平成26年度の活動・事業計画は、理事会、年次総会を経て決定しますが、既に内定しているものをお知らせします。

団・地区の活動予定との調整をお願いします。

### 【平成26年度カブラリー】

ねらい	組活動を中心に、スカウトの自主性を育む 北海道のカブスカウト・指導者の体験・交流を深める
テーマ	ボーイズ ビー アンビシャス ～カブの冒険・挑戦～
期日	平成26年9月13日(土)～15日(月・祝日) 2泊3日
会場	札幌市青少年山の家(札幌市南区滝野)ほか
内容	滝野すずらん丘陵公園施設活用プログラム。札幌市内探訪。 夜の円山動物園(予定)。キャンプファイヤーなど
運営	実行委員会を中心としたプロジェクト体制 参加指導者は全てプロジェクトメンバーとなる

### 【研修所・安全セミナーの開設】

種別	期日		開催地
WB研修所CS課程 北海道第47期	平成26年5月4日(日) ～5月6日(火)3連休	2泊3日 舎営	札幌市
コミッショナー研修所 北海道第9期	平成26年11月1日(土) ～11月3日(月)3連休	2泊3日 舎営	札幌市
安全セミナー	平成26年11月9日(日)	1日間	札幌市

### 【第56回全道スカウティング研究協議会】

テーマ (仮)	団の教育目標・活動目標実践状況交換 アウトドアチャレンジ: 野外力検定
内容	「団の教育目標・活動目標実践状況」の情報交換 「アウトドアチャレンジ: 野外力検定」を体験し、地域社会での事業やB-P祭等で活用を図り、ボーイスカウト活動普及のツール・手法を修得する
期日	平成26年10月25日(土)・26日(日)
会場	留萌地区 秩父別温泉 ちっぷ・ゆう&ゆ/合宿研修施設おおとり

### 【団・隊の教育目標と活動目標設定を】

『中期展望』で提案しました『団・隊独自の教育目標を設定し、その教育目標達成に向けた活動目標を立て、地域社会に“見える活動”を行い、団・隊の充実を図り、北海道のボーイスカウト運動のアイデンティティを確立しよう。』を平成26年度の重点項目とすることを、地区コミッショナー研究集会、理事会で協議します。

各団の平成26年度「教育目標・活動目標」設定の準備をしておいてください。

## =TOPICS=

### 【第23回世界スカウトジャンボリー（23WSJ）参加申込受付始まる】

2015年（平成27年）開催の23WSJ参加申込受付が始まります。  
詳しいことは、団委員長に送付しました「参加者募集要項」と日本連盟ホームページをご覧ください。

【スカウトの参加者年齢は平成27年（2015年）4月で中学2年生以上です】

【英語・仏語の日常会話が可能な参加隊指導者を優遇します】

【国際サービスチーム員（IST）／分団スタッフも同時に募集しています】

【第1次期日申込締切は平成26年（2014年）5月末日】

【参加経費】20数万円程度

◇参加費：10万円（第1次期日申込5%割引）

◇オペレーションきらら：1千円 ◇日本派遣団経費：2万円

◇分団経費・事前訓練経費：未定 ◇交通費：8万円（16NJ実績から想定）

### 【カブスカウト隊・ビーバースカウト隊 楽しい集会 テキストとDVDの活用を！！】

北海道連盟では、カブ・ビーバーの活動の充実を図るための「集会の方法」「プログラム事例」などをハウツー的に解説したテキストと基本訓練のDVDを作成し、刊行しました。

テキストとDVDセットで1,000円です。北海道連盟事務局にお申し込みください。

「北海道連盟ビーバー・カブ プロジェクト」では、隊・団への訪問支援を行います。

トレーナーやプロジェクトメンバーが、このテキストとDVDをもとに集会の組み方、プログラム企画の知恵など隊・団の状況に即して、指導者の方々と共に考えアドバイスします。

派遣要請を北海道連盟事務局にお申し出ください。

### 【平成26年度継続登録締め切りは3月15日（土）】

北海道連盟の平成26年度の継続登録締め切り日は3月15日（土）です。

日本連盟への申請とともに登録料の納入、北海道連盟に分担金を納入して継続登録が完了となり、「そなえよつねに共済」は、登録が完了しないと補償されませんので、ご注意ください。

上進年齢のスカウトは個別に役務変更の入力処理が必要です。

3月26日（水）から4月1日（火）まで年度更新のため登録システムが休止となります。

## =編集後記=

◇ ボーイスカウト教育の特性である「班制教育」（パトロール・システム）の研修会での、小山忠弘先生の講演録、扇間コミッショナーの講義録特集を発行します。

◇ 小山先生からは、ボーイスカウト運動推進、指導者の責務・役割について、示唆に富んだお話をいただきました。「中期展望」と合わせて、団・隊で読み合わせ、論議をされることを推奨します。

斧の響き 148号（平成26年3月1日発行）

発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 長岡 正彦

〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条14丁目3-40 北海道ボーイスカウト会館内

Tel 011-823-7121／ Fax 011-814-9377 E-Mail bs-douren@bz04.plala.or.jp

北海道連盟公式HP <http://www.bs-douren.org/>